

# ふるさと再発見 第33回

Re-discovery Omihachiman

## 近江八幡偉人伝 ⑥

幕末の三筆の一人

# 貫名 菘翁

『近江八幡の歴史』第9巻「地域文化財」より、近江八幡の偉人を紹介します。今回は、「幕末の三筆」として著名な貫名菘翁（1778年～1863年）を取り上げます。

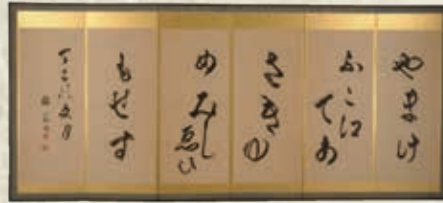
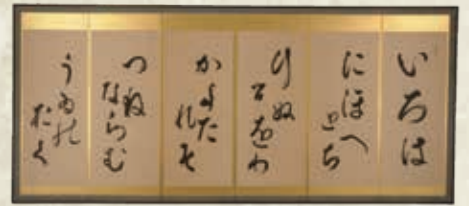
貫名菘翁は、阿波徳島藩の旧家で生まれ、晩年は京都に居を構えました。菘翁が八幡を訪れたのは、文政7（1824）年、47歳の頃で、美濃を訪れた帰途、八幡に立ち寄り、地元の人々と交わりました。『平安人物誌』によると、その2年前、京都・富小路四条上るに住宅を構えていたので、菘翁にとって八幡は比較的近距离に位置する街でした。その後の、菘翁の八幡との交流を伝えるのは、旧野間清六邸に伝わる弘化4（1847）年作「視履考祥」（これまで行つて

きたことをふり返る、という意味）と書かれた扁額で、70歳頃にふたたび八幡を訪れたようです。

菘翁には、多くの弟子がいましたが、八幡にゆかりのある人物としては、日根対山、小林卓斎などがいます。後者は、鑑定家としても知られ、八幡には菘翁の書に対しての識語を記した



上：視履考祥扁額 下：芙蓉千古雪額



上：いろは大字屏風（右隻）  
左：同（左隻）

作品がいくつか残ります。同じく、旧野間清六邸にある「芙蓉千古雪」の扁額は、文久2（1862）年、菘翁85歳時の作品であり、山々に降り積もる雪の美しさを表わしています。この書について、小林卓斎は、「書法は遒勁円活（筆勢が力強く、穏やかでとどごおりがない）にして、字は龍跳虎臥（筆に勢いがあり、のびのびとしている）の勢い有り」と評しています。菘翁は、2年前の83歳の時に中風を患い、手足が満足に動かせない状況で

した。にも拘わらず、このような力強い筆勢の書を書けたことに、卓斎は大変感心しています。八幡に伝わる作品の中で、晩年の傑作の1つに、観音正寺所蔵「いろは大字屏風」があります。彼が80歳の時に書いたこの作品は、空海こと弘法大師の作と伝わる「いろは」47文字の仮名を、1双の屏風に力強く、そして芸術的に書いたものです。元々、「いろは」を作品として書く書家は少なく、恐らく菘翁が最初の人でしょう。

「いろは」を作品として書いた理由には、菘翁が17歳の時に高野山で勉強に励んだ際に、空海の書の作品にふれたことから、空海への憧れによるものでしょう。また、八幡に伝わっていることから、同地域の子どもたちに対しての教育的側面があったのかもしれません。

ご紹介した作品は、東近江市五個荘にある観峰館で、9月18日（土）から開催の特別企画展「文人の行き交う街」で展示されます。八幡の旧商家に伝わる菘翁作品の数々を、この機会にぜひご覧ください。

（公財）日本習字教育財団 観峰館  
学芸員 寺前公基

## 人口と世帯 令和3年8月1日現在 ( )は前月比

|    |          |        |
|----|----------|--------|
| 総数 | 82,251人  | (- 34) |
| 男  | 40,414人  | (- 34) |
| 女  | 41,837人  | (± 0)  |
| 世帯 | 34,754世帯 | (± 0)  |

※外国人住民(42か国・地域/1,604人)を含みます。

🚨 新型コロナウイルス関連の情報は、市ホームページをご覧ください

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本紙掲載の催しが急に中止や延期になる場合があります。開催の可否は事前に担当課または主催者へご確認ください。また、最新情報は、市のホームページ <https://www.city.omihachiman.lg.jp/> で随時発信しておりますので、ご確認をお願いします。

